三次創作 リリカルなのはーーーとある罪悪［クライム］の物語

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三次創作　リリカルなのはーーーとある罪悪［クライム］の物語

【Ｎコード】
Ｎ８８７５Ｖ

【作者名】
偽善者と書き道化

【あらすじ】
瞬さんの作品、「リリカルなのはーーーとある運命の物語」に登場させて頂いているクライムの過去話……言わば、三次創作の様なものです。

とある運命の物語の三次創作なのに、内容は何処までも暗く救いはありません……。
瞬さんの作風が好きな方は……読まない方が良いかもしれません。
ちゃんと投稿してよいと許可は頂いています。

では、どうぞ……。

（前書き）

こんにちは、偽道です。
後書きに物語中に書き損ねた……或いは書けなかった事の補足をしようと思います。

……と言っても、自分では気づけない物があると思ので、そこ等は感想の方で質問して頂くと助かります。

では…

俺が何をしたのだろう？
俺は何でこんなにも地獄を味わう？
教えてくれ……俺は…なんの為に生まれたのか……誰か…教えて…。

リリカルなのはーーーとある運命の物語
三次創作「とある罪悪［クライム］の物語」

五年前

「ぼくの勝ちだよ……ロウファ」

その、堂々と……自身に満ち溢れた親友の姿に言葉が詰まった。

機動六課
僕があまり好ましく感じなかった部隊の名だ。
まあ、厳密には部隊長が個人的に嫌いなだけだったし……あまり表立って騒いだりしなかったけど。
あの狸とはソリが合わない。
まあ、人生どうしても気に食わない奴なんて幾らでもいる。
気に食わないから排除……なんて考えを起こすのは子供だけだろう。
しかし……機動六課…か。

認めざる得ないな……。

「ああ、そして僕の敗北だ」

僅か一年前までの僕の親友……レオンはここまで強くなかった。
泣き虫で……臆病で…それに似合わず妙に戦闘狂で……。
戦いには躊躇しない奴で……でも、戦う事に躊躇して……。

僕なんかより、魔法の才能がある事は知っていた……。
でも、たった一年……そのたった一年でコイツは……

「もう、守ってやるなんて言えないな」

手の掛かる弟分は、僕よりも高みへと登ってしまった。

「うん、だからロウファもぼくとエリオの事はそんなに心配しなくて大丈夫だよ」

そうか……と頷いた。
その後、海に上がる為に慌ただしく訓練室を出て行ったレオンを見ながら苦笑した。

空を見上げる。
そこには、雲ひとつ無い晴天で……何時か三人で見上げた時の様に綺麗で……でも、今は僕一人しかここにはいなくて…。

「ああ……くそっ…悔しいな…」

一人だけ、あのスタート地点に置いてけぼりにされた気分に陥った。

夢があった……
いや、人によってはコレを呪いと言うかも知れない。
十一年前
僕の本当の父さんと母さんが死んだ事を聞かされた時から抱いた想い。
「誰も死なせない、誰も傷付けない、誰も……悲しませない」
コレは……余りにも甘い幻想だと言う事は分かっているつもりだ。
それでも……この抱いた想いは…。
「きっと間違えじゃない」
だから、きっと僕は道を違えずに走る事が出来ると思う。
きっと……

帰りの途中、二つのおもちゃのデバイスを購入して家に向かう。
青とピンクの子供らしいデザインのおもちゃ……きっとカレルとリエラなら喜んでくれるとついつい頬が緩む。
シスコン&ブラコンなのは百も承知だ。
寧ろ、何が悪い！？

邪な目で見ている変態な訳じゃないだ。
ただ、小さい子供を見てると癒されるだろ？
ほら、小動物を見ている時の感覚に近いアレだ！

「……て、僕は誰に言い訳しているんだ？」

自分の今まで頭に浮かべていた考えに苦笑するしかなかった。

だから……家の玄関を開けるまで…

「なっ……に？」

異様な気配と…

「ほう……遅かったな…ロウファ」

異様な魔力を……

「何を……何をしたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

この血の臭いに気付かなかった。

直ぐ様、手元にあるデバイスを展開し…魔法弾を銀髪の魔導師にブチ込み、血溜まりに倒れ伏した人に近づく。
ソレは……もう、生きてはいなかった。

暖かさは残っている……でも、息をしていない…笑ってもいない……。

「何で……何で！？」

クロノ・ハラオウン
僕の二人目の父は目を見開いたまま永遠の眠りについていた。

「何で！！」

デバイスを構える。

「くくく、やはりキミ達親子はいつも面白い反応を見せてくれるな……ロウファ」

何時の間にか立ち上がっていた男に魔法を撃ち込む。

「少し……冷静になってはどうかね？」

「黙れ……黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れぇぇぇぇ！！」

スティンガーレイ、スティンガーブレイド、ブレイズキャノン、ブレイクインパルス。
頭に思い浮かぶ限りの魔法を目の前の男にブチ込む。

なのに……なのになのに！！

「やはり……この程度か…キミも」

何でコイツは死なない！？
何でコイツは倒れない！！

「ふむ、仕方がない……。
エイミィ、この男を捕らえろ」

「うん、分かったよ……龍二さん」

突然、背後から身体を拘束された。
一体誰が？
肘で腹を殴り飛ばし……後ろを振り向くと…

「何で……母さん」

そこには僕の二人目の母……エイミィ・ハラオウンの姿があった。

「どうしてアイツの言う事を聞いてるんだ！？
何故！父さんが、父さんが殺されたのに！！」

「簡単な話だよ。
私はクロノより、龍二さんが好きなだけ。
龍二さんがクロノを殺したのはきっと仕方ない事なんだよ」

その言葉に頭が真っ白になった。
目の前の人は……何を言った？
この女は……なんと言ったのか？

「くくく、まあそんなにロウファを追い詰めないでくれたまえ。
今から、彼は私の遊び相手に為るのだからな」

龍二と言う男の手が……身体の内部にズブリと沈んだ。
痛みはない……まるで…水に手を沈める様に自然に手が身体に入り込む。

「……！」

声は出なかった。
だが、それでも龍二は僕が何を言ったか分かったのか薄っすらと笑みを浮かべ……。

「くはははは！
そうだ、それこそキミらしい！
復讐に囚われてこそ、ロウファ・ハラオウンは強くなる！
流石は復讐の起源を持つ男だ！！」

何かが終わったのか、龍二は僕を振り払う様に腕を引き抜く。
その勢いで宙で何回か回転した後に身体は壁に叩きつけられた。

「憶えて起きたまえ……私は五年後にユーノ・スクライアを殺しに行く。
そして、お前が私を殺すチャンスはそれが最初で最後……くくく、たまにはこの様な余興もなくてはな」

朦朧とした意識の中、僕は去り行く二人を睨み続けた。

信じていた……家族の絆を。
信じていた……その優しい笑顔を。
好きだった……この家族が。
裏切られた……母だと思っていた人に。

殺して……やる。
あの、龍二と言う名の男を。

信じない。
もう……裏切られるのは嫌だ。

要らない。
大切な人などもう要らない。
喪った瞬間、こんなにも虚無感を感じるのだから。

現代

「カハァ…」

視界が朦朧とする。
本当に……世界は理不尽で溢れている。

「なんで龍二さんを殺したの……なんで！！」

ああ、もう……この女が何を言おうと何も感じない。
やっぱり……兄弟を…親友を切り捨てた俺の心には……復讐しか残ってないのかな？

二年前

「おかしいだろ！
何で俺の身体治らないんだよ！！
俺はチートだぞ、転生者なんだぞ！！」

もう、何度こんな似た台詞を聞いた事か？
妄想もいい所だろう……不死身…その様な物がこの世に存在する訳ない。

「……貴様は転生者でいいんだな？」

「ヒィ！？」

正直、“転生者”と言う言葉が何を差しているのかは分からない。
言葉の通り……転生した者？

あり得無い。
おそらく、何らかの実験か何かで生まれ変わった様に強く為った者の総称だろう。

「何なんだよ！
お前だって転生者なんだろ！！」

……そうかもしれない。

俺の仮説が正しければ……あの日、龍二に何かをされた俺もまた……転生者。
何故なら、あの日以来、俺の筋力や魔力はグンと上がった。
まるで……別の何かに生まれ変わったみたいに。
「そうだな……俺も…お前と同じ転生者だ」
「だったら……！」
「お前の戯言には興味ない」
小太刀を振り下ろす。
それだけで男の口は永遠に動かなくなった。
「……デバイス？」
男の手にあるデバイスに首を傾げる。
転生者は大抵デバイスなど不要の存在だし、デバイスを扱う奴は殆ど格好つけの愚者の中でも飛びっきりの愚者だ。
自分で処理した方が早い魔法を、ただ格好良いからと言う理由でデバイスを使うのだから怒りや呆れを通り越して笑うしかない。
「ティルフィング？
悪趣味な名を付ける……」
ティルフィング
確か、どっかの金ピカが三度の勝利を与える変わりに願いを叶え終えれば使用者を死に追いやるとか言っていたか？

どの金ピカが言っていたのか？
金ピカは白髪褐色の男に次いで転生者には多いからな……。

「ん……珍しく俺でも使えるか」

転生者のデバイスは大抵、無駄に性能がいい。
変わりに使用者以外をマスターと定める事は殆どないし……何処で製造されているのかも謎。
やはり、転生者はスカルエッティみたいな科学者によって作られた…或いは改造された人間なのか？

「見つけたよ……ロウファ」

「……またか、お前もしつこいな…レオン」

振り返れば、元機動六課のＦＷ陣と言う豪華な面子があった。

「時空管理局、特務六課、高町　なのは一等空尉です」

「……」

この女は知っている。
いや、高町　なのはを知らない者など管理世界にいる筈ないか。

「貴方は、余りにも多くの悲しみを生み出しています。
ロウファ・ハラオウン元捜査官……もう、やめてください」

だが、それだけではない。
彼女は確か……そう、俺が捨てた家族…カレルとリエラの面倒を見てくれている。

「ロウファ……どうして、何でこんな事をするんだ！
ぼく達の誓いは！？
忘れたの……ロウファ！！」

忘れた訳がない……。
今は遠きスタート地点に棄てた…綺麗な理想。

「勘違いするな……俺はクライムでロウファなんて奴じゃない」

そうだ、ロウファと言う名は……こんな殺戮者に与えられた名ではない。
俺はｃｒｉｍｅ……宗教的にも、道徳的にも、法律的に見ても罪人。
ただ、復讐に生きるだけの罪人。

「ティルフィング……三度の勝利を与える魔剣。
早速使わせて貰うとしよう！！」

全てを切り捨てる。
傷付くのはもう嫌だから……愛も友情も…要らない。

現代

残った意識を総動員して顔を上げる。

ああ……守れたんだ。
復讐に囚われた俺でも……。
「ユーノ……さん、カレルと……リエラ…おね…が…」
「ロウファ！
くそっ、何で身体が動かないんだ！！」
格好いいとこなどない。
俺は復讐のついでにユーノさんを助けた…。
多分……それだけなのだから…。

数時間前

ユーノさんの前に躍り出てティルフィングを前に突き出す。
その切っ先には……何時か見た赤黒い血濡れた様な長刀がある。
「やっと……やっとだ…」
やっと現れた。
やっと出逢えた…。
やっと

やっとやっとやっとやっとやっとやっとやっとやっとやっと！！

「やっと……殺せる！！」

多くの転生者を屠って来た。
様々な世界で殺して……殺して殺して殺して殺し尽くした！

「くくく、ロウファ。
キミの行く先々は実に楽しかった！
キミの通った後は……嘆いていない人間などいなかったよ！！」

「転生者など、この世に不要。
それに、奴らはどいつも同じだ……気に食わなければ殺す、殺しはせずとも……再起不能になるまで叩く！
例え、自らに非があろうと……それすらも力でねじ伏せる！
そんな……存在……生かした所で、より多くの悲しみを生むだけだ！」

「くはははは！
今回のロウファは随分と我が強い。流石に父親を殺して直ぐに母親を寝取ったせいか？」

「あんな女は母などではない！！」

ティルフィングを振るう。
一心不乱に……ただ、目の前の男を殺す為に。

「ロウファ……私はキミの絶望が最も好きでね……例えばコレはどうかね？」

突如、ユーノさんに龍二は手をかざした。
それと同時に、ユーノさんは急いでプロテクションを張ったみたいだが、龍二の放った炎の熱を防ぎきれないのか苦悶の表情を浮かべている。

「貴様！」

「どうした？
早くしなければユーノが死んでしまうぞ？」

良いだろう……貴様の好きにはさせない。
守ってやる……ユーノさんを死なせずに貴様を殺す！

現代

気付けば、真っ白な世界に立っていた。
意味が分からない。
ここが煉獄の炎に包まれた暗い場所なら地獄に堕ちたと納得できるが……。

「ようこそ……天国へ」

目の前に現れた無精髭を生やしたおっさんに警戒しながら礼をする。

「すみませんが、何故俺が天国なんかに？

俺の行き着く先なんて……地獄以外にあり得無い」

「ん、ああ…転生者を殺しまくったからかい？
アレは別に良いんだ。キミはキミの本質［起源］に素直にしたがっただけだろ」

おっさんは懐から煙草を取り出しプカプカと煙を吐き出す。
……天国などと言うイメージが欠片と浮かばない。

「僕の仕事はさ……まあ、掃除屋を製造する事だよ」

「掃除屋？」

「そう、最近上流階級の神共がさ……キミの住んでいた世界などをアニメや漫画に小説として観測出来る世界の住人に強大な力を持たせて転生させるという遊びが流行っててね。
たく、僕達みたいな下流階級には良い迷惑さ……世界の矛盾の修正がどれ程大変か」

成る程……神様に蘇らされた…か。

数分前

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

視界は白黒に変わる。
身体を動かせばゼリー状の何かの抵抗を感じる。
御神流、奥義の歩行…・…神速。
復讐に囚われた俺が出会った御神　美沙斗さんの流派の奥義。
俺と同じ復讐者故に一時的に弟子入りした人。
俺と同じく、守る為の技術を……傷付ける為に扱う人。
だから、あの人とは気があった。
必要以上に踏み込まず、何かがアレば……両者共に笑顔で背後から斬りかかる事の出来る程度の信頼関係。
「なにっ！？」
「コレで！！」
膝の砕けた痛みが脳を貫く。
でも……
「ゴホッ……くくく、それでこそロウファ……私の生み出したイレギュラー…」
天夢　龍二を殺せた。
膝が痛い……神速…未熟な俺ではたった一度の発動でコレだ。
「ははは……」
だけど、コレしか無かった。
魔法による補助でも、神速並のスピードを安全に扱える。

でも、奴の不意を突くには……魔力を扱わない神速しか無かった……。

例え、それで身体中が使い物にならなくなろうと。

「終わった……終わったんだ」

ああ、忘れていた。
ユーノさんを助けないと……。

奴に勝つには……ユーノさんを無事に生かしたまま…奴を殺したと言う結果しかあり得無い。

「くっ……はぁっ！」

自由に動くのは右手だけ。
その腕で不様に這いずりながらユーノさんの下へと向かう。

カチャン

そんな音が聞こえた。
振り返れば……

「よくも……龍二さんを！！」

ティルフィングを構えた母さんが……。

「あっ……」

ティルフィングは、胸に深く深く抉りこむ。

三度の勝利を与える魔剣……。
ああ、そう言えば……今日…このデバイスを使ったのは…

三度目

現代

「起源……て何なんだ？」

「そのモノの存在の因となる混沌衝動。
その存在がはじまった場所、魂の原点。
まあ、言うなれば……人間では絶対に抗えない本能かな」

その言葉に思わず笑ってしまった。
つまり……つまり俺は…

「それじゃあ、俺は生まれながら……復讐の為に生きてきた？」

「御名答。
そう、キミは……転生者と言う存在を掃除する為にいる生まれながらの復讐者だ」

成る程……ならば理解できる。
つまり、“僕”に与えられていた平穏も……幸せも…“俺”を作り出す為の糧。

俺を……復讐者にする為の…生贄。

「実際、キミは転生者のいる世界では高確率で大切な人を失い、復讐に走る」

そうか……俺は…こんな物の為に…。

「勘違いして欲しくないのは……キミは神によってそう運命付けられた訳じゃない。
真祖の姫君なき世界が我々神に対抗する為に作ったのがキミ達だ」

キミ……達？

「俺以外に……こんな存在がいるのか？」

「当たり前だろ？
例えば……クリフと言う少年。
彼の起源は“犠牲”。犠牲を作り、犠牲になる事で世界を救う。
彼の場合……どの彼も１４歳の誕生日を迎えた者はいない。
転生者なき世界なら不要な存在故に火災で死に、生き残る世界は……転生者共々闇の書事件までには確実に死亡する」

それは、自分以上に悲惨な運命に翻弄された少年の話だった。
巫山戯ている……。
神も、転生者も……世界も！

「……ここで本題だ。
キミには……キミの存在した世界と近しい場所に転生して欲しい」

「俺に……奴らと同じ世界のエラーになれと？」

「違う、エラーを修正するプログラムになって欲しい」

その後、詳しく話を聞いた。
ある世界が……異常な程にイレギュラーが存在し…転生者が妙な位多く集っていると言う。
だと言うのに、世界のエラーを修正するクリフ達は……既に亡くなっている妙な世界。

「だから、毒を持って毒を制す。
キミには奴らと同じ……転生者と言う毒になって貰う」

「……構わない。
どうせ、俺に出来るのは……復讐だけだ」

それに、奴等に対する憎しみは今まで以上に膨れ上がった。
俺達は……生まれる前からアイツ等に人生を滅茶苦茶にされている。
ただ、奴等の想像物の住人だからと言うだけで……奴等に見下されている！！

「これ、持って行くと良いよ。
何故かその世界にはサーヴァントシステムまであるからね。
それを媒体に召喚するといい」

手の中にあるのは錆びた鉄の欠片。
誰の遺物かは……何となく理解できた。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

身体が光に包まれる。
まるで俺の心とは真逆の光……。
それに、拒絶される様に……俺は下に下に落ちていった。

目を開ければ……空は漆黒に染まっていて、月明かりだけが地上を照らしていた。
探さなければ……転生者を。

「く、くそぉ！！なんであいつはこんなに簡単にフェイトたんの家に入れるんだよぉ！！……でも僕は神からもらった不死身の体がある！！これさえあればいつかは！！」

そんな、馬鹿見たいな叫びが聞こえた。
不死身……か。

「見付けたぞ……転生者」

不死身を名乗るのは大概は転生者だ。
目の前のまるまると太った男は怯えた様に小さな悲鳴を上げる。
驚かせ過ぎたか？
仕舞ったな……これじゃあ効率良く殺せない。

「お、おおおおま、お前は、転生者なのか！？」

転生者……その言葉に吐き気を覚える。
とは言え、間違ってはいない……俺も確かに転生者。

「あぁ、そうだとも、貴様と同じ転生者だ」

「だ、だったら都合がいい！！あいつは今、フェイトたんの家に居付いている。間違いなく僕らの障害になるだろう。あの邪魔な奴を協力して消そうじゃないか！！」

ああ……やはり転生者は屑の集まりか。
邪魔な奴を消す……何故…何でそんな簡単に……。

「……え？ぎ、ぎゃあああああ！！！！い、痛い！！！痛いよ！！！！！な、何でだよ！！！死なないんじゃないのかよ！！！何で治らないんだあああああ！！！！！」

仕舞ったな……頭に血が上り過ぎた。
不意討ちするなら……心臓か首を狙うべきだと言うのに…。

「俺の“転生者を狩る死神”の力でお前から“不死身の体”を奪った。今のお前には普通の人間の体しかない」

ならば仕方ない。
少しでも……相手に冷静さを失って貰おう。
不死身の転生者にとっては……死より恐ろしい物はない。
死ぬ可能性を突きつければ簡単に恐怖に呑まれるだろう。

「なんでだ！！何で死んで行くって分かるんだ！！い、嫌だあああああああああ！！！」

男は、何かを背後の空間から取り出し投げつけて来た。

「チッ……あの男…金ピカの能力持ちか」

ならば、警戒すべきはエアと言う銘の剣。
奴が冷静さを取り戻せば……その剣を取り出すかもしれない。

「間を与えはしない」

元より、転生者である限り……この身から逃れる術はない。
“果てなき追跡者”は……誰一人逃しはしない。

気配を手繰り、ビルを跳躍し続け……奴を見つけた。
どうやら、俺から逃れられたと安堵している様だが……。

「ふんっ！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！な、何でだ！！！！！何で逃げられないんだ！！！くそおおおおぉぉぉおおお！！！！！」

また逃げられても面倒なので左足を斬り捨てる。

「無駄だ。“果てなき追跡者”は貴様がどこまで逃げようがすぐに居場所が分かる。これで終わりだな」

「お、おかしいだろ！！！なんでお前も転生者なのに僕を殺そうとするんだ！！」

「あぁそうだ、俺は転生者だ。ただ、貴様らと違って、俺の目的は“転生者に復讐する”っていうだけだ」

そもそも、お前達転生者はどうせ……近い内に縄張り争いで戦い始める。
死ぬのは早いか遅いかの差だ。

「な、なんでだ！！僕は復讐に関係ないだろ！！」

「分かってるさ。これはただの八つ当たりだってことぐらい。
それにそんなに無駄に殺そうとはしないさ。
でも、さっき貴様は言った、邪魔者を消そうって。その時点でお前はただの危険人物だ。
それでも理由としては充分だろ」

いや、半分嘘だ。
おそらく俺は……転生者を見れば間違いなく、どんな奴でも斬り捨てるだろう。

この身を焼き焦がす憎しみの炎に従い。
この身の本質たる起源に従い。

「俺はクライム、この身はただの復讐者。貴様等と同じ存在にして、貴様等を狩る死神……。
虐げられしこの身の憎しみ……貴様で晴らさせて貰う！！」

小太刀を振り下ろす。
あらゆる世界で虐げられし我等の憎しみ……受け取るといい！！

金ピカは死んだ。
後は……。

「転生者……ハラオウン執務官の下にいるのか？」

フェイト・T・ハラオウン
俺の叔母さん……。
あの人も天夢　龍二の味方だった筈。
最後の戦場でティルフィングを抜いた二度目の戦い。
左腕を斬り捨てたが……彼女は生きているだろうか？

「まあ、あんな奴等の心配など不要か」

何故、女性はあんなにも簡単に家族を、夫を、恋人を、友人を裏切れるのだろう？

「母さん……何で…父さんを裏切った？
何で……俺を殺せた？」

分からない……分かりたくもない。
人間なんて信用出来ない。
だって、あんなにも簡単に人を裏切る。

歩いている内に、何か騒々しい会話が聞こえてきた。
それに……引き摺り込まれる様にそこへと向かう。

「武蔵、お前はロリコンに身を落としてしまったのか？」

「さすがは士郎、俺の思った通りの事を口走ったな、この金髪貧乳少女趣味の野郎が」

「う、五月蠅いぞ武蔵！！セイバーはそういうので好きになったんじゃない！！！」

「あぁ、実年齢はお前より遥かに年上だから、本当はオバコンか」

「違うわぁァァァァァァ！！！！！！」

そこには、見知らぬ少年二人に……よく知る女性の幼い姿があった。

「転生者じゃ……ない？」

少年二人に、果てなき追跡者が発動しない。
ならば、あの二人は転生者ではない……なら。

「俺達と同じだとでも言うのか……」

世界の修正力。
ただ、転生者を殺す為だけに生かされた存在……。

「チッ……俺には…関係無い」

そうだ、関係無い。
あいつ等と俺は関係無い。

「俺は転生者を狩るだけだ……その過程で…あいつ等は勝手に救われろ」

そうだ……俺は復讐者。
誰も救わないし誰も助けない……。
ただ、転生者を抹殺すると言う行動で偶々奴らの運命が覆る……それだけだ。

「すまない……レオン、エリオ…。
俺は……もう、かつての夢を語らない」

誰も死なせない、誰も傷つけない、誰も悲しませない……。
最早語れぬ遠い遠い理想。

「誰も信じない、誰とも関わらない、誰一人……逃さない」

今や、あの時の言葉とは真逆になってしまった信念。

それでも……それでも…俺は……。

（後書き）

さて、後書きに目を通して頂き有難うございます。

まず、ロウファの一人称。
彼はロウファであった時は“僕”と名乗り、クライムと名乗った後は“俺”に変わります。
単純に、コレは物語中に語った様にロウファは死んだと言う思いから来ています。

ロウファ……ロウ、秩序や正義と意味が入っている彼の名は、復讐者と変わり果てたクライムには重過ぎた故に理想や絆と共に棄てた名です。

クライムが不死身の転生者を殺せた理由。
それは、龍二に何かをされた時……「転生者を狩る死神」と言う力を植え付けられた為です。
故に、クライムは無意識の内に転生者の不死性を打ち消していた……と言う訳です。
転生後は、神様にその能力の事を教えられています。

エイミィやフェイトを憎み続ける理由。
クライムは、ニコポやナデポと言う魅力魔法や洗脳魔法の存在を知りません。
それ故に……エイミィとフェイトを裏切り者として憎み、その親しい人の裏切り故に軽い人間不信に陥っています。

勝手に救われろ。
コレは、完全にはクライムが棄てられなかったロウファの優しさで

す。
直接救う気も無く、関わりも持ちたくない……でも、無意識の内に彼は自分と同じ境遇（だと思っている）武蔵と士郎を救おうとしている……。

まあ、救いと復讐なら復讐を優先するでしょうが……彼に残った小さな優しさだと思ってください。

誰も逃がさない。
つまり、転生者は誰一人見逃しはしないと言う意味。
誰かに心を救われない限り、クライムはコレを実行し続けるでしょう。
最近のその傾向は瞬さんの作品で出る大河に対してだと思います。

例え、善人でも彼の目には転生者と言うフィルターが掛かり悪党と認識してしまいます。
まあ、コレは自分の想像で瞬さんには別の意図があるかもですけど。
あくまで、三次創作なので見逃してください。

ティルフィング
丸投げです。
ただ、舞台を飾る為だけに出しました。
瞬さんの描く世界感に使われるか否かは瞬さん次第。

神速
半ば独自解釈あり。
でも、膝の故障が完治した恭也でも、一日三度以上使えばまた身体を故障させる可能性がある程使い所が難しい歩行。
ならば、付け焼刃の未熟なクライムはこの程度かな……と。

美沙斗さんに弟子入りした期間は龍［ロン］にいた転生者を殺すまで。
多分、半年から一年は共に行動していたと思う。
この世界の美沙斗さんは今だ娘と恭也に救われず復讐者のままです。

こんな所でしょうか？
取り合えず、コレでクライムの過去を描いた三次創作は終了します。

それでは、最後まで有難うございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8875v/

三次創作 リリカルなのはーーーとある罪悪［クライム］の物語

2011年8月20日22時40分発行